＜前回・ティリッヒ１・前期＞

（１）ティリッヒの思想史的位置

・近代世界のキリスト教　→　弁証神学：神学・信仰と哲学・文化、教会と社会

・自由主義神学と弁証神学：総合あるいは第三の道

１．『キリスト教思想史講義』（A History of Christian Thought）の構想から

(1) 思想史という研究領域とその目的

I hope you will discover that the past can be interesting even in itself, (297)

there always exists this twofold purpose of a course in history, and especially of a course in the history of thought. The main purpose is to understand ourselves; (297)

(2) 思想史の諸動向・諸要素、思想のテロス

(3) 近代という知的なプロジェクト

I will develop the different elements in this divergent situation which had to be united. After having shown these elements, namely, Orthodoxy, Pietism, the Enlightenment and Romanticism, etc., I will discuss the greatest the most embracing and effective, but in the last analysis unsuccessful attempts to bring about a union of all of them. I call these *the great synthesis*.

the theology of Schleiermacher and the philosophy of Hegel --- these two great representatives of the synthesis in the early nineteenth century --- ... They are very genuine and have had a tremendous impact on the whole history of thought to the present day. (300-301)

These two thinkers, Schleiermacher and Hegel, are the points toward which all elements go and from which they then diverge, last bringing about the demand for new syntheses. We will see how these new syntheses have been attempted again and again, and finally what in my opinion has to be done today.

２．思想の発展史：初期（-第一次世界大戦）／前期（1919-1933）：意味の形而上学
　／中期（1933-第二次世界大戦）／後期（1946-1960）：存在論
　／晩年（1960-1963）

３．一貫性と変化（思想の諸レベルにおける議論）：弁証神学・宗教哲学、象徴論
　前期：文化の神学、宗教社会主義論
　後期：組織神学、宗教心理学・精神分析

（２）前期ティリッヒ：認識論から存在論へ

４．19 世紀から 20 世紀の哲学の展開＋弁証法神学

５．Kairos und Logos: Eine Untersuchung zur Metaphysik der Erkenntnis (1926), in: MW.1

0) 問題：歴史主義（19 世紀の学的神学の帰結）を克服する真理の動的理解

1) 西洋思想史の二つの流れ：
　主流（方法論的流れ、合理的学の理念・形式主義）と傍流（神秘主義、生の哲学）
　　直観的記述的、反省的説明的

2) 真理は超時間的・超歴史的。抽象的な真理概念　→　カイロスへのアスケーゼ
　永遠の真理

3) 認識の歴史性・決断→存在の歴史性・決断
　　（実在論：認識の合理性は対象の側から規定される。）
　歴史主義的な相対主義への回答は、真理自体の歴史性において可能になる。
　「ロゴスは時間のなかにはいってきて、その内的無限性を啓示するのである。」
　　ロゴスはカイロス的である。

Der Logos wird Fleisch; er geht ein in die Zeit und offenbart seine innere Unendlichkeit. (290)

So dient der Kairos nichte der Verhüllung, sondern der Offenbargung des Logos. (296)

4）ヨハネ福音書のロゴス論（受肉）→ドイツ観念論・後期シェリング
→後期ハイデッガーの真理論・存在論
Seinsgeschichte、Geschick
ハイデッガーは聖書的か？

5）絶対者自体が動的歴史的である。
cf.　・形而上学的な神＝神の不可受苦性
・弱い神、あるいはプロセス神学
弱い神の方が、より高い。
↓
後期の「相関の方法」という語り方へ
カイロス→状況、ロゴス→メッセージ。

６．西田幾多郎「場所的論理と宗教的世界観」（1946）
（上田閑照編『自覚について　他四篇』岩波文庫）

（３）ティリッヒの神話論

７．ティリッヒによる神話論の概要
die *negativen Theorien* des M. bestreiten dem M. einen selbstständigen Gehalt. (229)
die *positiven Theorien* des M. sprechen den mythischen Schöpfungen eine selbständige sachliche Bedeutung zu. (230)

消極的な理論：還元主義的な神話論、神話を社会的心理的な作用・領域へ還元する。
寓意的な諸理論(die *allegorische*)、心理学的な諸理論

積極的な理論：神話自体の論理構造から神話を論じる。
シェリング（象徴的、現実主義的な理論）die bedeutungsvollste *metaphysische* Theorie
カッシーラー（認識論的理論）die *erkenntnistheoretische* Theorie

８．批判哲学→文化の哲学→刷新された実在論に基づく宗教思想：宗教言語、神話
Langdon Gilkey, *Nature, Reality, and the Sacred. The Nexus of Science and Religion*, Fortress, 1993.

波多野精一「宗教哲学の本質及其根本問題」（1920）：波多野宗教哲学の原型・原構想
「カント」「批判主義」「カントを理解することは彼を超越すること」「しかもカントを超越しよ」（200）「うと欲する者は、先ず最初に彼を理解しなければならないのである。批判主義はその主義と精神とをカントから継承する」、「歴史においてその具体的内容を実現する文化の諸領分に関して、それの理性における根拠、その各に一定の意味、一定の価値を与える原理を研究することに、批判主義の根本精神は存在する」、「カントは先ず『純粋理性批判』において、かかる新しい方法、新しい態度を学問の範囲について提出し、遂行した。そして彼は次第に道徳や美的生活の領域へ、同じ態度、方法の適用を広めていった。宗教に関する彼の議論は、幾分の不完全と不徹底とを免れ難いが、しかも原理的には同一の精神に立脚しておるということができる」、「カントにおいて、宗教哲学が批判主義の指示す新しい道を出発し、進行しておるのを見るのである」（201）
↓
カッシーラーの「象徴形式の哲学」

９．カッシーラーの象徴形式の哲学における神話論
Er schreibt dem M. eine eigene innere Sachhaftigkeit zu, die sich in dem gesetzmäßigen,

sinnvollen Aufbau der mythischen Welt ausprägt. Der M. ist wie Wissenschaft, Kunst, Sprache ein notwendiges Element des Geisteslebens. Seine Realität beruht ebensowenig wie die Realität jener Sinngebieten auf den Schaffen einer in sich sinvollen geistigen Welt. (230)

10．シェリングの実在論

Er (Schelling) sieht in ihm den Ausdruck eines wirklichen theogonischen Prozesses, d. h. eines Prozesses, in dem sich die in Gott geeinten Prinzipien widerspruchsvoll im menschlichen Bewußtsein durchsetzen. Von hier aus gibt er eine umfassende realistische Mythendeutung. (230)

↓

カッシーラー＋シェリング

批判哲学＋実在論　→　批判的実在論、超越的実在論

die *symbolisch-realistische* Theorie

11．Ernst Cassirer, *Philosophie der symboloschen Formen. Zweiter Yeil. Das mythische Denken*, 1925,（Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1977）

（４）キリスト教信仰にとって神話とは何か

12．「非神話的な意識というようなものが存在しうるか」

「歴史的現実と、神話を作り出すところの人間精神の構造」

ob es ein schlechthin *unmythisches* Bewußtsein geben kann, (229)

durch gleichzeitiges Schauen auf die geschichtliche Wirklichkeit und auf die Struktur des menschlichen Geistes, der den M. schafft. (229)

13．「破られた神話」der *gebrochene M.*

「神的なものを空間と時間のなかへもちきたらし、人間の形姿にかたどって客体化する行為」

「神話の克服」、預言者的、神秘主義的、哲学的

神話は克服されるが、神話の実質は残されている。

「神的なものの無制約的超越についての意識によって破られた神話」、「神話が破られている場合には、神話的なものはあらゆる宗教の一要素」

Die im M. enthaltene Vergegenständlichung des Göttlichen in Raum, Zeit und Menschenbildlichkeit wird von der prophetischen Frömmigkeit bekämpft, von der mystischen überboten, von der philosophischen als unwürdig und widersinnig dargetan.

Das Göttliche ist erfaßt als das Unbedingte, Seins-Jenseitige; es geht nicht ein in Raum und Zeit. Aber es ist nur anschaubar in Symbolen, die raum-zeitlichen Charakter haben. Der M. ist überwunden, aber die mythische Substanz ist geblieben.

Vom Standpunkt des gebrochenen M. aus ist das Mythische ein Element aller Religion, ist M. *religiöse Kategorie*.（231）

↓

神話という表現形態にそれにふさわしい位置を与えること。宗教的象徴自体（その対象的形態）と宗教的象徴が指示する実在との区別に基づく、宗教的象徴体系としての神話の存在意義の正当な評価。

素朴実在論などによって実体化された神話表象の否定、しかし、無制約的なものは形態化（神話）を必要とする。図式、象徴。

８．ティリッヒ２

（１）キリスト教思想と体系構想

１．体系は合理的思惟の特性である。概念・命題の相互連関の構築。
　　哲学的思惟との関連性。
・ヘーゲル『精神現象学』（中央公論社）:「哲学というものは、本来、特殊なものを自分のうちに含む一般性というエレメントにおいて成立する」、「全体としての生命を成り立たせる」、「現実的な知識になるという目標」、「知識というものは、知識体系、すなわち学問でなければならない、という内的必然性」、「真理の真の形態」「概念というエレメント」、「哲学は、しかし、みずから戒めて、お説教になりたがってはいけない」、「真なるものを、実体としてばかりでなく、まさに主体として把捉し表現すること」「生きた実体は、存在といっても、真実には主体であるところの存在である」、「真なるものは全体である」「他となることを含む」「単純なる生成」「運動であり、生成の展開」、「真なるものは体系としてのみ現実的であるということ、あるいは、実体は本質的に主体であるということは、絶対者を精神として語る考え方のうちに表現されている」
・ハイデッガー『ヘーゲル『精神現象学』』（全集32巻）創文社。
「学の体系は第一に精神の現象の学であり、第二に論理の学である」、「体系は必然的に二つの形態において現われる」、「思弁的哲学と有論〈オントロギー〉との統一は、ヘーゲルの論理学に固有の概念である」、1807-12（精神現象学-論理学）、「体系の理念に関して変化が生じつつあったことのしるし」。
　　cf.キルケゴール
・Paul Tillich, *Vorhesung über Hegel*（Frandfurt 1931/32）(ENGW. VIII),De Gruyter,1995.
　　若きヘーゲルから『精神現象学』
２．相互連関の形態の多様性。
　1)対話　→　スコラ的形式化：問いを項目に分節し、それについての複数の異論とそれぞれへの反論がなされ、解答が提示される。トマスの『神学大全』。
　2)時間的展開過程：経綸、救済史　→　原理的秩序：三位一体
　3)原理から諸命題の推論・演繹：近代的
　4)ネットワーク、類似性・連想性による関連づけ。ポストモダン。
３．キリスト挙思想の体系化の歴史的変遷＝パラダイムの転換？
　オリゲネス、トマス、シュライアマハー、バルト、そしてティリッヒ
　　↓
　近代：3)。問題は、原理を見出す方法。ハイデッガー「世界像の時代」などを参照。
　合理的形態とは？　合理性は知の目的性と関係づけられる。
４．方法論の問題
　近代的知における再帰性（→懐疑）の制度化（ギデンズ）
　　芦名定道「戦後・組織神学の歩みと課題」『福音と世界』2015.8、新教出版社、6-13 頁。

（２）ティリッヒ神学の方法と体系

		Question	Answer
Vol.1	Introduction		
	Part I	Reason	Revelation
	Part II	Being	God
Vol.2	Part III	Existence	Christ
Vol.3	Part IV	Life	Spirit
	Part V	History	Kingdom of God

・Being / Existence / Life・History
・God / Christ / Spirit：Trinity
Creation / History / Eschaton・Eternity：History of Salvation

＜ **ST1** ＞ Introduction:

A. The Point of View.
1. Message and Situation
2. Apologetic Theology and the Kerygma

B. The Nature of Systematic Theology
3. The Theological Circle
4. Two Formal Criteria of Every Theology
5. Theology and Christianity
6. Theology and Philosophy: A Question
7. Theology and Philosophy: An Answer

C. The Organization of Theology

D. The Method and Structure of Systematic Theology
8. The Sources of Systematic Theology
9. Experience and Systematic Theology
10. The Norm of Systematic Theology
11. The Rational Character of Systematic Theology
12. The Method of Correlation
13. The Theological System

５．ティリッヒ組織神学構想：
「相関の方法」（Method of Correlation）によって構成される体系の横軸（横構造）
＋　三位一体論的あるいは救済論的な体系の縦軸（縦構造）

６．神学の解釈学的構造
1）「相関の構造」:「問いと答え」の相関＝解釈学的構造、自己同一性と状況適応性
・問いの定式化（哲学）←状況
・メッセージの答えとしての提示・解釈（神学）
2）「個と共同体」の循環：共同体における問答・討論・対話の個人による集約

７．「問いと答え」の定式化における哲学（あるいは哲学的要素）の役割
問いと答えは自律性を保ちつつも、相互に依存し合っている（＝循環）。
↓
「諸科学、哲学、神学（答えとしてのメッセージの解釈）」の三者の関連づけが問題となる。

８．「すべての神学的労作の一つの極である『状況』とは、個人や集団がその中において生きるところの経験的な心理学的社会学的状況を意味しない。その状況とは、彼らが彼らの実存の自己理解をその中で表現するところの科学的、芸術的、経済的、政治的、倫理的諸形態の総体を意味する」、「神学が考えなければならない『状況』とはそれぞれの時代にさまざまの心理学的社会学的諸条件下においてなされる創造的な実存の自己理解である。」（4）

９．解釈学的中心（意味付与原理）としての規範：多様な素材を一つの意味連関へとまとめあげ、神学に組織あるいは体系という統合的な形態を与える。
規範は歴史的形成物であり、神学者の共同体性（教派性）。

10．ティリッヒの組織神学体系を「問い」から見る。

・方法論→認識論→存在論
・存在論＝基礎的存在論＝人間論
・人間存在：本質＝有限性／実存＝疎外／生（個と共同体）＝現実
　　生は、本質と実存の混合　→　両義的
　　本質と実存は、現実性として生の構成要素。いずれも現実的。
　　しかし、本質から実存への移行という枠組みで言えば、本質＝可能性、実存＝歴史的現実性。
　　↓
弁証法か、飛躍か。

＜参考文献＞

０．*Tillich・Main Works ・Hauptwerke. 1 - 6*, de Gruyter.
Paul Tillich. Gesammelte Werke, Bd.I-XIV, Evangelisches Verlagswerk, 1959-1975.
Ergänzungs- und Nachlaßbände zu den Gesammelten Werken, Bd.I- XVI, de Gruyter,1971-
１．ティリッヒ『組織神学』第１、２、３巻、新教出版社。
Paul Tillich, *Systematic Theology. Vol.1, 2, 3*（1951, 1957, 1963）,
The University of Chicago Press.
↓
独訳：*Systametische Theologie. Bd.I, II, III*, Evangelisches Verlagswerk.
２.『ティリッヒ著作集』全10巻＋別巻3巻、白水社。
３．ヴィルヘルム・パウク＆マリオン・パウク『パウル･ティリッヒ　１生涯』
ヨルダン社。
４．芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版。
『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社。
「「ティリッヒ――２１世紀へのメッセージ」、『福音と世界』2000 年４月号、
新教出版社、18-23 頁。
５．土居真俊『ティリッヒ』日本基督教団出版局、1960年。
６．Deutsche Paul-Tillich-Gesellschaft：http://www.theo.uni-trier.de/tillich/tillich.html
ティリッヒ研究会（休会）：https://sites.google.com/site/kyotochristianstudies/home/tillich
ティリッヒ研究文献（芦名研究室）：http://tillich.web.fc2.com/sub8b.htm
ティリッヒ（LogosOffice）：http://logosoffice.blog90.fc2.com/blog-category-17.html
14. アンソニー・ギデンズ『モダニティと自己アイデンティティ――後期近代における自己と社会』ハーベスト社。（Anthony Giddens, *Modernity and Self-Identity. Self and Society in the Late Modern Age*, Stanford University Press, 1991.）
15. Ingolf Dalferth, *Theology and Philosophy*, Wipf and Stock Publishers, 1988（2001）.
16. パネンベルク『学問論と神学』教文館。